

## チョーサーの作品の中の植物とハーブについて

小林 絢子

Plants and Herbs in Chaucer's Works

Ayako KOBAYASHI

生物を動物と植物に分けて、後者を plant と呼んだ英文の初出例は *Oxford English Dictionary* によると16世紀であるが、plant は「若い木、灌木、ハーブ」の意味では古英詩の時代から使われていた。<sup>1)</sup> 従ってイギリスの文学作品の中にも古くからこの名詞は登場し、ピーター・ミルワードは『英文学のための動植物事典』の中の plant の項で古くは「創世記」(2章5節、8節)に主なる神が「野のあらゆる木」(every plant of the field)を作った、と書かれている、と述べている。<sup>2)</sup> plant の下位区分として grass, herb, flower, shrub などがあるが、grass は古期ノルド語系、即ちオランダ語やフリジア語から古くに英語に入り、非穀物類ではあっても家畜の食糧にもなる葉や茎をもつ草一般を指す時に使われた。<sup>3)</sup> Herb はそれに比べてややおそく、古期フランス語の erbe から英語に借入された。もとはラテン語の herba 'grass, green crop, herb' であったため ME (= Middle English c.1100～1500) の中でもチョーサーの時代 (c.1340～1400) ともなるとフランスからの発音通りに書いていたのを改めて、ラテン語のように語頭の h- をいれて herb (es) と綴られるようになった。herb ははじめ草一般を指し、grass とほとんど同義であった。Grass としての herb はフランス語の erbe と同じものを指した。定義は「茎が灌木や木のように固く強くなく、やわらかくて、水分を含んでいて、花や実をつけたあとは、地に這うように落ちる植物」<sup>4)</sup> である。しかし herb は同時に食用あるいは薬用としての効力も認められていたため、次第に grass との意味の住み分けがなされ、herb のほうに「薬草」の意味が定着していったとみられる。これは茎の他に葉が大いに活用され、芳香も含めて、その薬効は中世人に重宝がられたからで、herb は英国中世詩人の目にとまって文学作品の中に登場するようになったのである。

本論文では英国中世の博学な詩人ジェフリー・チョーサーの主要な作品 (*The Book of the Duchess* c.1369; *The House of Fame* c.1379; *The Parliament of Fowls* c.1380; *The Canterbury Tales* c.1387-1400; *Troilus and Criseyde* c.1385; *The Legend of Good Women* c.1386)<sup>5)</sup> を取り上げ

て、その中で作者が示す動植物への関心を herb を中心にみていくことにする。

チョーサーは文学語学ばかりでなく、神学、哲学、薬学、占星術（天文学）、自然科学にも造詣が深かったといわれるが、まずその幅広い知識を蓄積した生涯を概観してみよう。

チョーサーは若いころから宮廷に仕えたり、税関・林野庁に勤めていたためにその生涯は比較的良好にわかっている。宮廷詩人としてはウエストミンスター寺院のちに Poets' Corner とよばれるようになる場所に 1400 年 10 月 25 日に埋葬されたのだからその評価は晩年には確立したものだったに違いない。

生年は数少ない資料の中から Scrope-Grovenor 事件という 1346 年の記録に「この事件の証人として出頭したチョーサーという男が 40 余才だ」とあることなどから、大体 1340 年頃を推定するのがふつうである。<sup>6)</sup> 父 John は Ipswich 出身の富裕なワイン商で、母 Agnes も伯父から土地や店舗や庭園を複数ロンドンに相続した金持ちの娘であった。チョーサーは Thames 河に近い商人街に生れ、近くの St. Paul's Cathedral の学校へ通ったのではないかと思われる。彼の作品、例えば *Troilus and Criseyde* に出てくる作者の尊敬する古代の詩人たちの名（Ovid, Homer, Lucan, Stace 等）が同時代の同校の校長の所蔵している図書リストと一致しているという。チョーサーの神学や音楽の知識もここでまなんだのかもしれない。<sup>7)</sup> 少年として初めて彼の名が出るのは、有名な Edward III の息子 Lionel の妻 Elizabeth のための出納帳の中である。その 1357 年の欄に「ジェフリー・チョーサーのための上着とズボン」のための出費の記録があったことが記されていて、小姓としてのチョーサーの出仕を示唆している。

当時はフランスとの百年戦争（1337～1453）の最中だったので、チョーサーは 1359 年には Lionel についてフランスに遠征した。彼は Reims の近くで捕虜になり、翌年に 16 パウンドの身代金を王に払ってもらって帰国した。

1360 年（20 才頃）から 6 年間の動静は判然としないが、フランスに行ったり、王の長男の兵隊集めに協力したりしていたらしい。1366 年には父が死亡し、自分は Philippa de Roet と結婚した。ノルマン征服のあと渡英してきたフランスの騎士の家系の娘であった。この間チョーサーは Edward III 王の宮廷で Valettus（又は exquire (esquire)；有事には軍役もする側近）として仕え、その傍ら法学院（Inner Temple）で学んだ。法学士達はラテン語とフランス語に堪能でなくてはならなかった。チョーサーの *Boece* や *The Romaunt of the Rose* のような翻訳や翻案が彼がこの両語に通曉していることを示しているが、その素地はここで培われたと思われる。彼は又、1366 年から 1370 年までと 1372 年に度々フランスやイタリアに Lionel の兄の John のために出かけているが、その際に後に彼のイタリア物と呼ばれる Boccaccio や Petrarch の写本に触れたのではないか、といわれている。

1374 年に彼は税関吏（羊毛、獣皮、皮革の輸出）となる。その給料の他に、彼は初めて宮廷詩人らしい報酬を得ることになった。Edward III はチョーサーに詩の献呈のお礼に毎日 1 ガロンのワインを与えることにしたのである。<sup>8)</sup> 王の死後（1377）それは年金にかわった。税関吏の仕事には 1382 年に「小口」商品が加わった。また 1386 年にはケント州の knight of shire にも任命され、巡

回裁判などで多忙な日々を過ごすようになった。

1389年は夫人を亡くしたり、職業が王宮や王室用地の修理保存監督に変わったりしてチョーサーにとって多難な年であった。翌年には職業柄、強盗にであって職員用の給料を奪われている。この間、宮廷ではEdward IIIの孫Richard IIが王位についていたが、チョーサーは前述のように彼から年金をもらったり、彼の叔父で政敵であるJohnのために詩を書いたり（チョーサーの妻の姉はJohnの後妻）という努力を続けた。Johnの息子がHenry IVとなった後も宮廷との良好な関係は続き、1400年6月に未払いの給料の一部を受け取ったという最後の公式の記録がある。チョーサーは*Complaint to His Purse*などに見るように自分の貧窮を訴える短詩をいくつか作ったが、実際は官吏としての受給資格はあったのである。

チョーサーの詩作の才能をいち早く認め、彼に1375年から年金10ポンドを与えたのはEdward IIIの4男Johnであった。それはJohnの妻Blancheが亡くなった後にチョーサーがその死を悼んで詩を書いたことに対するお礼といわれている。

チョーサーの生涯はこのように宮廷人の側近としての役割が長かったが、彼は常に外国を含めた文学作品に触れ、翻訳や著作に精を出した。彼の処女作といわれる*The Book of the Duchess* (=BD) とそこにあらわれる自然の描写からまず見ていくことにする。

この愛の物語詩は1334行から成り、中世フランスにみられた夢物語という舞台設定で始まる。その序詩290行はこの詩の本来のテーマ（作者チョーサーとJohnとの出会いやJohnの妻Blancheの死）とは殆ど関係がない。序詩はCeyx王とその死を嘆く妻Alcioneの愛情を取り扱っているのだが、Ceyx王は溺死したので場面は海底が多く、野原や戸外の情景は出てこない。本題に入っても唯一草花が出てくるのは、その初めの頃に詩人が狩りの一団についていく、そして、Johnとみられる黒衣の騎士のいる森に入っていく、という所だけである。詩人は案内するかのように飛び出してきた子犬について森の奥深くに分け入る。

And I hym folwed, and hit forth wente  
Doun by a floury grene wente  
Ful thikke of grass, ful softe and swete  
With floures fele, faire under fete  
And litel used; (BD 397 ~ 401)

そして、私が、おいかけると、  
子犬は、花咲く緑の小道を下って行った。  
そこには、柔らかく、美しい草が茂り、  
足下には、たくさんの、美しい花が咲き、  
そこは、ほとんど使われていないようだった。<sup>9)</sup>

草花も慰めにはならないし、薬草も妻を亡くしたJohnの心の傷の手当にはならない。Johnは次のように言う。

No man may my sorwe glade  
That maketh my hewe to fulle and fade,  
And hath myn understondyng lorn  
That me ys wo that I born!  
May noght make my sorwes slyde,  
Nought al the remedyes of Ovyde,  
Ne Orpheus, god of melodye,  
Ne Dedalus with his playes slye;  
Ne hele me may no phisicien,  
Noght Ypocras ne Galyen; (BD 563～572)

何も私の悲しみを取り去ることはできません。  
オヴィドの「恋の治療薬」も  
音楽の神オルフェウスも  
すぐれた才能のあるデダルスも  
どんな医者も、ヒポクラテスもガリエンだって  
私を癒すことはできません。

亡妻へのJohnの宮廷愛風の追慕がこれに長々と続くのであるが、医者や恋の指南書も癒せない哀切の情に対して自然物の無力がつくづく感じられる詩である。結局はすべて詩人の夢だったということでは終わる。

次に書かれた*House of Fame* (=HF) は1589行の未完の作品で3部から成る形式である。第1部はBDと同じく本題の序詩というべきもので、トロイの陥落後のAeniasとカルタゴの女王Didoの悲恋の物語が詩人（チョーサー）の見た夢として語られる。それはガラスの館の壁にかけられた絵画に描かれていたことになっているが、詩人は絵よりもそこにはめこまれた銘板の上に書かれた物語を紹介する、ということになっている。このVirgilの有名な物語は歴史物語とも男による女の捨て去り物語ともいえるもので、その500行くらいのまとまりのなかに、花鳥風月の出てくる余地はない。BDの序詩は全体の2割を占めていたが、HFの場合は2.5割に達するにもかかわらず、である。

第2部で詩人はワシの爪に捕まえられて、広大な平原、山谷、森、河川を越えて名声の館へ連れて行かれる。ワシは道中で詩人に対し、その館には地上から全ての音が名声の女神に届くように仕掛けが作られている、と説明し、彼をその近くで降ろす。ここまでで全詩の半分を費やすが、自然

描写は殆ど無い。

第3部では名声の館がすべて緑柱石で作られ、壁がんの周りにはギリシャ神話や聖書に出てくる人物や過去の有名な詩人たちがいて、そのうしろには多勢の音楽家や奇術師、魔女たちがいた、と書かれている。

Ther saugh I pleye jugelours,  
Magiciens, and tregetours,  
And Phitonesses, charmeresses,  
Olde wicches, sorceresses,  
That use exorsisacions,  
And eke these fumygacions; (HF 1259～1264)

そこで、私は、手品師、  
魔術師、奇術師、  
女占い師、女魔法使い、  
老女の魔法使い、女魔術師が  
演ずるのを見たが、彼らは、  
魔よけや、香煙を用いるのだ。

とあるが、草木や薬草には触れられていない。詩人はさらに進んで金色まばゆい広間を抜けて、多数の目と舌を持つ、宝石に飾り立てられた名声の女神に会う。金属の柱の上に立っている古今の有名人们は皆、女神に名声を与えてほしい、と頼んでいた。女神は運命の女神の妹だった。詩人はがっかりし、その館を出て、とある一軒家に入ってみると、そこは民衆の溜まり場で、そこではさまざまな噂がとびかっていたが、その声や音は女神に全部届くのだった。ワシが戻ってきて、詩人は帰ることになるが、その時ある人を見つけた、という所で未完になっている。

第2部で平原や谷や山を越えたことや、名声の館が氷の岩石の上に建てられていること以外、この詩の本体は室内の事柄で占められているといえよう。

*The Parliament of Fowls* (=PF) は700行位の全詩のうち、初めの100行はアフリカーヌスがスピキオに公共の福祉のためにつくせば幸せの国に至ることができる、と教え、諭すことで始まる。しかし、本論は鳥たちの恋愛についての論議なので、前作よりも自然界に関係がある。鳥はそれぞれ(階級に応じて)止まり木にとまっているから、木々の名前が出てくる。

For overal where that I myne eyen caste  
Were trees clad with leves that ay shal laste,  
Ech in his kynde, of colour fresh and greene  
As emeraude, that joye was to seene.  
The byldere ok, and ek the hardy asshe;

The piler elm, the cofre unto carayne;  
The boxtre pipere, holm to whippes lashe;  
The saylynge fyr; the cipresse, deth to playne;  
The shetere ew; the asp for shaftes pleyne:  
The olyve of pes, and eke the dronke vyne;  
The victor palm, the laurer to devyne. (PF 172~184)

眼を向けた至る所に、  
永遠に続く葉で装いをこらした樹々があり、  
どの樹々もそれぞれ瑞々しい緑色に、  
エメラルドのごとく、見るも喜ばしかった。  
建築用の樫が、固い秦皮（トネリコ）が  
つかい棒と死体の棺に役立つ楡が  
笛にふさわしい黄楊が、鞭の柄にふさわしいトキワガシが  
帆柱用の樅が、死を悼むための糸杉が  
狩りの道具、弓に役立つ橡（クヌギ）が、滑らかな矢によいポプラ、  
平和の徴のオリーブが、酔いを誘う葡萄が  
勝利の徴の棕櫚が、予言に使われる月桂樹があった。

続けて草花の羅列があるが、特定の花の名は出てこない。

A gardyn saw I ful of blosmy bowes  
Upon a ryver in a grene mede,  
There as swetnesse everemore inow is,  
With floures white, blewe, yelwe, and rede,  
And colde welle-stremes, nothyng dede,  
That swymmen ful of smale fishes lighte,  
With fynnes rede and skales sylver bryghte. (PF 183~189)

（緑の草原の川のほとりに）  
花咲き匂う枝がいっぱい茂る庭を見た。  
そこには常に甘い香りが漂い、  
白い花、青い花、黄色い花、赤い花が咲き乱れ、  
涸れることを知らぬ冷たい泉川があり、  
赤い鰭と銀の鱗の  
軽快な小魚がいっぱい泳いでいた。



そして、そこは温度も快適で、夜はなくて昼ばかりだという。それから「万病を癒す薬味類も薬草も生えていた」(206) といっているが、個々の草名は挙げられていない。自然環境としては一般的に鳥たちのとまっている木のある所が桃源郷であるかのような描写である。

チョーサーの代表作である *The Canterbury Tales* (=CT) は17,000行余のオムニバス形式の物語り群から成っている。カンタベリ一行きの巡礼は作者自身によると29人であるが、お供がいたり、途中で割り込んできたりする人がいるので、その数は正確ではない。旅の道すがら、各自が1つずつ昔話を提供する。未完の物語も含めて24の話のうち自然描写や生き物の健康描写に関心が払われている箇所がみられる物語に焦点をあててみる。

巡礼の仲間を紹介する「総序歌」(858行) には美しい自然描写があり、旅の出発が4月であることがわかる。春の新鮮さ、瑞々しさを西風の息吹や、太陽の位置や鳥の恋歌などであらわす一方、擬人化された4月の雨の恵みを冒頭にもってきて強調し、自然の摂理をたたえる。

Whan that Aprille with his shoures soote  
The droughte of March hath perced to the roote,  
And bathed every veyne in swich licour  
Of which vertu engendred is the flour;<sup>10)</sup> (CT Gen. Prol. 1~4)

四月がそのやさしきにわか雨を  
三月の旱魃の根にまで滲みとおらせ、  
樹液のひとつひとつをしっとりと、  
ひたし潤し花も綻びはじめるころ<sup>11)</sup>

春のことを単に「花が咲きそろう季節」と表現していない所が面白い。Of which vertu の which は前行の swich licour を指すので、直訳は ‘the virtue of which’ (その {= 優しい雨の} おかげ様で) となるが、virtue は L. virtus からきていて、現代英語における美德とか「おかげ様」という以上の意味、生命の源の意味もあった。<sup>12)</sup> その上、4月のにわか雨は大地をその root (根元) まで潤すのであるから、この表現は自然の回復力の強さ、深さを存分にあらわしているのである。

ハーブでは根菜のようにその根に効力を持つものもあるが、ここではそこまで言及していない。又、西風が息吹を注ぐ ‘holt and heeth’ も「雑木林や木立」と和訳してあるが、本論文の冒頭で述べたハーブの定義と合致しない。しかし PF (ll. 898~903) で詩人チョーサーがワシにつかまえられるながら空中を飛んだ時下界に見た自然の描写より、ずっと目線が具体的である。

その後「総序歌」では各巡礼の姿形、服装、職業、評判、習癖などが語られ、自然界や植物への関心はほとんど示されない。

CTの「総序歌」に続く各巡礼の話の中の第1話は騎士 (Knight) によって話される。これは

ボッカチオ（Boccaccio）の *Il Theseida* からとられたもので、パラモンとアーサイトという若い2人の騎士がアテネ王の義妹エミリーに恋するという物語である。エミリーが5月の朝に2人が囚われている牢獄から見える庭を散策する、という場面の自然描写が有名である。

Till it fil ones, in a morwe of May,  
That Emelye, that fairer was to sene  
Than is the lylie upon his stalk grene,  
And fresher than the May with floures new —  
For with the rose colour stoof hire hewe,  
I not which was the fyner of hem two. (*Kn Tale* 1034 ~ 1039)

And in the gardyn .. / ... /  
She gadereth floures, party white and rede,  
To make a subtil garland for hire hede (*Kn Tale* 1051 ~ 1054)

とある五月の朝のこと、  
緑の茎の上に咲いた百合の花よりも見た目になお美しく、  
新しい花々の匂う五月の季節よりもなお新鮮な、  
かのエミリー姫が（と申しますのは、彼女の顔色が  
薔薇とその色香を競い、いずれがいっそう美しいか、  
わたくしにはわからないくらいですので）

彼女は・・・好むがままに赤や白のまじった花を集め、  
頭にのせる精巧に編んだ花輪を作りました。

この後、この物語ではアルシーテがアテネ王テセウスの温情から追放処分になり、名を替えて戻ってきて、王宮に仕えることになっている。そしてある朝、宮殿のちかくの茂みで脱獄したパラモンと出会うのである。時節はやはり五月であった。

(He) ... to the grove of which that I yow tolde  
By aventure his wey he gan to holde  
To maken hym a gerland of the greves,  
Were it of wodebynde or hawethorn leves, (*Kn Tale* 1505 ~ 1508)

（彼＝アルシーテは）・・・わたくしが申し上げた  
例の茂みの所へ偶然道をとることになったのです。  
それも山査子（サンザシ）の葉や忍冬（スイカヅラ）で



花輪を作るためでした。

後の英文学や演劇では草花はふんだんに登場するが、チョーサーでは花や草木はの上や横を通り過ぎる人物の添え物、という印象がある。それを手にする人物の動作も小さく、この物語ではエミリーもアルシーテも花でただ「花輪を作る」だけである。チョーサーの作品では後述する *Legend of Good Women* (=LGW) でも花輪を作っている。

この物語の終わりに近い所でアルシーテは馬上槍試合でパラモンに勝ったにもかかわらず、その直後の落馬事故で亡くなる。その時の傷の手当にはハーブが使われる。

To othere woundes and to broken armes  
Somme hadden salves, and somme hadden charmes;  
Fermacies of herbes, and eek save  
They drunken, for they wolde hir lymes have.  
For which this noble duc, as he wel kan,  
Conforteth and honoureth every man,  
And made revel al the longe nyght  
Unto the straunge lords, as was right.      (*Kn Tale* 2711 ~ 2718)

ほかの傷口や折れた腕には、或るものは  
膏薬をあてがい、また治療のまじないをするものも  
ありました。さらに薬草やセージの薬を煎じて  
飲んだ（飲ませた・・・筆者）りもしました。

The clothred blood, for any lechecraft  
Corrupteth, and is in his bouk ylaft,  
That neither veyne-blood, ne ventusynge,  
Ne drynke of herbes may ben his helpynge.  
The vertu expulsive, or animal,  
Fro thilke vertu cleped natural  
Ne may the venym voyden ne expelle.      (*Kn Tale* 2745 ~ 2751)

（上から入れる嘔吐剤も下からの通じ薬も  
だめなのです。 身体 of そのあたりがすっかり  
毀れてしまっているのです。 今や大自然の力が  
働こうとしないのなら、医術よ、さらばです。）  
いったん固まった血は、どんな医術をもっても

腐敗してゆくばかりで、その血管の中に血が  
残ったままになっているのです。どんな地を抜く術も、  
吸い玉による放血の手だても、薬草を煎じた飲み薬も  
彼の治療には役立ちません。毒を放出する力も、  
あるいは呼吸を取り戻す力も、自然の力と呼ばれる  
肺の幹なる動脈から毒物をなくしたり  
追い出したりすることはできません。

アルシーテの遺体を焼くための森の木々の伐採、森の精の動揺の描写が続き、20余りの木々の名が挙げられる。樅 (ook 'oak'), 樅 (firre 'fir'), 樺 (birch), アスペン (aspe 'aspen'), 榛の木 (alder), 姥女樅 (holm), ポプラ (popler), 柳 (wylugh 'willow'), 榆 (elm), 鈴懸 (plane), 桤 (トネリコ) (asshe 'ash'), 黄楊 (box), 胡桃 (chasteyn 'chestnut'), 菩提樹 (lynde 'lindenbaum'), 月桂樹 (laurer 'laurel'), 楓 (mapul 'maple'), 山査子 (thorn), 山毛櫸 (ブナ bech 'beech'), 榛 (ハシバミ hasel 'hazel'), 櫟 (イチイ ew 'yew'), 水木 (whippeltree 'cornel') (*Kn Tale* ll. 2921 ~ 2923) である。香木についての描写はここでは次の通りである。

Ne how the fyr was couched first with stree,  
And thanne with drye stikkis cloven a thre,  
And thanne with grene wode and spicerye,  
And thanne with clooth of gold and with perrye,  
And gerlandes, hangynges with ful many a flour,  
The mirre, th'encens, with al so greet ordour; (*Kn Tale* 2933 ~ 2938)

また火が初めは藁でおおわれ、  
ついで乾いた木切れで三つに裂かれ、  
それから緑の木と香料、さらに金の布や宝石、  
数々の花をつけた花輪、没薬、非常に匂いのかぐわしい  
香がその上におかれたさま・・・などいちいち  
申し上げたいとは思いません。

次の粉屋 (Miller) の話は故事からとったものではなくいわゆるファブリオ (滑稽譚) である。オックスフォードに住む大工のジョンの妻アリソンが下宿させている同大学生ニコラスと浮気をする。状況描写がほとんどで自然の中の草木や花は登場しないが、冒頭の部分からニコラスが匂いの強い草を部屋に置いておいたという实际的な場面が展開する。

A chamber hadde he in that hostelrye

Allone, withouten any compaignye,  
Ful fetisly ydight with herbes swoote;  
And he himself as sweete as is the roote  
Of lycorys or any cetewale. (*Mil Tale* 3203～3207)

部屋には匂いのいい草があちこち  
きれいに飾ってありました。ご本人（ニコラス）自らも  
なんだか、例えば甘草の根か、生姜の根みたいに  
ぷんぷん匂っていました。

アリソンの容姿は果物や草花を使って描写された。例えば、彼女は  
She was ful moore blissful on to see  
Than is the newe pere-jonette tree,  
And softer than the whole is of a wether. (*Mil Tale* 3247～3249)

見た目に早熟れの満開の梨の木よりも  
もっと輝いて、美しゅうございました。・・・  
おまけに羊の毛よりももっと柔らかそうでした。

Hir mouth was sweete as bragot or the meeth,  
Or hoord of apples leyd in hey or heeth. (*Mil Tale* 3261～3262)

口は・・・干草や草むらに貯られた林檎のごとく  
甘うございました。

She was a prymerole, a piggesnye,  
For any lord to leggen in his bedde  
Or yet for any good yeman to wedde. (*Mil Tale* ll. 3268～3270)

この細君は・・・どんな立派な家来衆が妻にめとってもいい桜草、  
いや、かわいい豚の目草といったところでした。

粉屋と仲の悪い家扶（Reeve）のオズワルドは自分が若い頃大工だったので、大工が侮られる話に憤慨し、仕返しにシムキンという粉屋がひどい目にあう話をする。慾深いシムキンは粉ひきを頼んできた2人のケンブリッジの学生アランとジョンの馬を放してしまって、2人がそれを探してい

る間にひいた粉をごまかす。やっと馬を捕まえた2人はシムキンの家に泊まり、彼の妻と娘と通じ、その上パンも奪って帰っていく、という話である。予想通りというか、このようなドタバタ劇の中には植物観賞や自然描写は出てこないし、薬草を必要とする病気や傷もない。

料理人（Cook）の話は未完で短く、特筆すべきものはないが、この料理人は総序歌の中の紹介の項ではスパイスを使ってブラマンジェという煮込み料理を作るのがうまかったと書かれている。

A Cook they hadde with hem for the nones  
To boile the chiknes with the marybones,  
And poudre-marchant tart and galingale.  
Wel koude he knowe a draughte of Londoun ale.  
He koude rooste, and seethe, and broille, and frye,  
Maken mortreux, and wel bake a pye. ... (*Gen. Prol.* 378～384)  
For blankmanger that made he with the beste. (*Gen. Prol* 387)

料理人をその折、彼らはつれておりました。  
鶏を髓骨もろとも、酸っぱい味の香料や  
肉桂といっしょに煮るためでした。  
この料理人はロンドンエールを一飲みで  
きき酒するのがとても上手でした。  
枯葉じかに肉を焙ったり、煮たり、  
肉を焼き網で焼いたり、油で揚げたり、濃いスープを  
つくったり、パイを上手に焼いたりする料理法を  
よく知っておりました。・・・  
また、クリームや砂糖に粉の入った鶏肉料理にかけては  
最高の腕前でした。

弁護士（Man of Law）の話は西洋から東洋にまたがっている。キリスト教の信仰の深いローマのコンスタンス（クスタンス）姫がシリアのスルタンに嫁して姑問題と宗教問題で苦勞し、地中海をさまよって、英国のアラ王に助けられ、また姑によって加えられる試練にあつて海外に追い出され、ローマで救われて、皇帝の娘に戻り、夫のアラ王、息子である王子と再会する、という古典的な物語である。出典はニコラス・トリヴェのアングロ・ノルマン語による年代記であるが、筋を楽しむ系統の物語のせいか、自然描写との関わりは薄い。弁護士による序文も観念的な富への礼賛と貧困への軽蔑、恐れの記事になっている。

バースの女房（Wife of Bath）の話は序文が長く、その中でも彼女の5回の結婚、特に最後の夫、ジェンキンとの夫婦喧嘩のいきさつは有名である。これは全部彼女の頭の中か家の中でおきている

ことを述べていて、戸外に目をむける余裕はない。バースの女房が提供する話はアーサー王物語の挿話の一つといえるものである。彼の側近の若者が森で乙女を犯してしまい、処刑されることになったのだが、「女性が最も愛するものは何か」という問いに対して、一年以内に正しい答を見つけたら刑を免れることになった。期限の日の直前、彼が考えあぐねていると、老婆があらわれて答を教えるかわりに自分の願い事を聞き入れてくれ、というので、承知する。答は「夫に対して支配権を持つ」ということであった。その答は正しかったので老婆は彼に約束通り結婚してくれ、と迫る。彼は苦しみながらも彼女に説諭されて納得し、彼女を愛して結婚する、という話である。このようにこの話は人間の心理や倫理、願望を主題としているので森はでてきても重大な役割をはたしてはいない。

学僧 (Clerk) の話は Patient Griselda として有名で、忍耐強い女性の鑑のようなグリセルダについて語っている。イタリアのロンバルディア地方にあったサルツォという国のワルター王は貧しい村人の娘グリセルダをめとり、第1子、第2子とも自分の姉のもとに隠しておいて、妻には彼らは死んだ、と偽る。そしてある日、自分は新しい妻をめとる、といってグリセルダに婚礼の宴の準備を命ずる。そのような理不尽な命令にも彼女は従い、新しい花嫁とワルター王の幸せを心から祈ったので、ワルターは深く反省し、その花嫁は実は自分とグリセルダの間の娘なのだ、と打ち明けて詫び、改めてグリセルダ一家には幸せが訪れる、という話である。

サルツォーはアペニン山脈中のヴィゾー山からポー川が発して流れてくる所にあるが、野山の風景をチョーサーはここでは語ることをしない。ただ、グリセルダが薬草を食事の一部にしていたことが述べられている。冒頭でジャンクラ父娘を紹介する時である。

And whan she homeward cam, she wolde brynge  
Wortes or othere herbe tymes ofte,  
The whiche she shredde and seeth for hir lyvyng,                    (*Cl. Tale* 225 ~ 227)

彼女が家に帰ってくるときは  
薬用の草木や、ほかに薬草などを  
しばしば持って帰りました。それを  
彼女は小さく刻んだり、煮たりして  
彼女の食事にしました。

後に彼女がワルターの願望によって実家に追い帰された時に、彼女はいつも謙遜な心を持ち、贅沢を好む気持ちもなかったのが、普段通りに暮らした、とあるが、食物についても「繊細な味を求めなかった」 (*Hire goost was evere in pleyne humylitee; / No tender mouth, noon herte delicaat, Cl Tale* 926 ~ 927) とあるので、薬草は食用には適さない、という意識が著者にあったと思われる。

同じロンバルディア地方の話でも老騎士ジャヌアリとメイの話はもっと明るい。これは貿易商人 (Merchant) によって語られる。メイはジャヌアリの近習のダミアンと恋仲になるが、ある日、夫婦が庭園を散策することになった時、ダミアンが近くの梨の木に登ることにする。目のよく見えないジャヌアリを欺いて、2人で楽しもうというのである。メイは実が食べたい、といって梨の木に登り、ダミアンと楽しむが、その時ジャヌアリの目が (プルトー神のおかげで) 急に見えるようになり、一騒動が起こる。そこは女の知恵でメイは夫の目の回復のために木に登ってダミアンと取っ組み合いをしていたのだ、言い抜ける。梨の木が浮気の象徴というわけではないが、秘め事を隠し、挑発するのを助けたのだともいえる。

東洋の韃靼の国サライの王カンビスカンのカナセ姫が、魔法の力で鳥の話し言葉がわかるようになり、雌の隼の歎きを救う話は騎士の息子の近習 (Squire) がする。この話の舞台は広く、自然も奥深い。カナセ姫はアラビアの王からの使いである騎士から偽りを見破る鏡と上記のような力を持つ指輪を贈られる。その指輪は

And every gras that growth upon roote  
She shal knowe, and whom it wol do boote,  
Al be his woundes never so depe and wyde (Sq. Tale 153~155)

根を持つすべての草を彼女がよく知り、  
誰にをれが役立つかも知ることになる。  
たとえその人の傷口がどんなに深くひろがっていようとも。

つまりその指輪をはめていると草の薬効がわかるというのである。カナセがその指輪をはめて早朝の散歩に出かけ、隼と会話する場面には景色や花のことは出てこない。しかし隼が夫の裏切りの歎きを話して失神して倒れ落ちると、彼女にできることは「大地から薬草を掘り出して、この隼の傷を治すために、とても色の美しく貴重な薬草から新しい軟膏を作ることだった (If that I verrailly the cause knewe / Of yowre disese ... I wolde amenden it ... / As wisly helpe me grete God of kinde / And herbes shal I right ynowe yfynde. / To heel with youre hurtes hastily. (Sq. Tale 466~471) とある。

この話は未完なので、これ以上薬草の効能も魔法の力を持つ馬や剣のことも触れられていないが、その効能を知るためには魔法の指輪の力を借りなくてはならないとされている所にチョーサーが薬草の限界を見ていたとがわかる気がする。

郷土 (Franklin) の提供したブルターニュのアルヴェルグスという騎士と妻ドリゲン、そして近習のアウレリウスの三角関係の話は、海岸の岩を消したら、ドリゲンがアウレリウスの意に添う、と約束する所から始まる。魔術と恋の駆け引きが主な内容なので、植物は取り扱われていない。



次は医者（Physician）によるヴェルジニウスという騎士とその娘ヴェルジニアの話であるが、これも自然環境とはあまり接点がない。ある町の悪徳裁判官アッピウスによる計略でヴェルジニアが彼のものになりそうになったので、彼女の名誉を守るため父親のヴェルジニウスが彼女を殺す話だからである。奸計に長けた権力者の恐ろしさと名誉を重んじる騎士の精神のみが強調されている。

免罪符売り（Pardoner）の話ではCTの中で最も悪い人々が登場する。ペストの流行していた14世紀に死神に導かれて埋蔵金貨を町はずれの木の下でみつけた不道德な3人の男がいた。そのうちの2人がその中で最も若い者にパンとワインを買いに町に行かせている間に、その若者が帰ったら、殺して金貨を山分けにしようと相談する。殺した後2人はワインを飲むが、そのワインには若者が買い物の帰途に毒を入れておいたので、結局3人とも死んだ、という筋である。酒場の会話と慾深い心象風景のみが際立っている。

船長（Shipman）はパリの北のサン・ドニの貿易商人とその妻およびそのいとこと称する僧侶のジョンの三角関係の話をする。ジョンは商人が出張するに際しその妻に言い寄るが、それでは100フラン貸してくれ、と頼まれる。ジョンは商人から100フラン借りて商人の妻に貸す。商人が出張から帰ってその100フランを返せ、とジョンに迫ると彼はその妻へ返したことを白状する。妻はジョンから借りたことを認めるが、そのお金で自分を美しく着飾って夫を喜ばせたかったのだ、と言い張って許してもらう。この話も人間の慾と狡さを示していて、自然の摂理に目を向ける余裕はない。

尼僧院長（Prioress）はキリスト教徒の子供が讃美歌を歌いながらユダヤ人街をぬけて毎日学校へかよっていて、ユダヤ人に殺されたという話をする。モデルがLincolnという町に実在したということであるが、子供の手当ての際も薬草や薬剤の話は出てこない。

チョーサー自身が語る「メリベウスの物語」と未完の「トパス卿」の話は、前者はとても観念的、人道的な説教であり、後者は未完、すなわち若いトパスが冒険に出発する、ところで話が終わってしまっているので、自然探究の対象とならない。

次の修道僧（Monk）の話は、神話や聖書に出てくる人物、あるいは歴史上の英雄を紹介している。アダム、サムソン、ヘラクレス、ゼノビア、スペインのペドロ、キプロスのペドロ、ロンバルディアのベルナボ、ネロ、ホロフェルネス、アンティオクス、アレキサンダー、ジュリアス・シーザー等である。

この後、CTでは「総序歌」で紹介されていない3人の話が続くが、それについては後述すると

して、巡礼の残り2人の提供話を見ておく。

家扶（Reeve）の話はファブリオに属する妻の浮気の小話である。騎士フィーバスの妻が浮気をしているのを籠の中のカラスが見ていて、フィーザスに告げ口をした。彼は妻を弓矢で殺し、カラスの白い羽根をむしり取り、口をきけなくした。この惨劇はすべてフィーバスの館の室内で起こったことなので情景は限られている。

司祭（Parson）の話は徹頭徹尾キリスト教の罪と罰の話で罪業と告解と悔悛と償いの勧めである。7つの大罪を含む人間の罪深さとその原因の分析、改善の方法とその成果の追跡などが語られていてとても長い話であるが、終始抽象的、観念的で俗世の人々に神学の考え方の一端を説教することが目的のようである。

さて、上で述べたように、「総序歌」の中で紹介されていない3人（尼僧付き僧侶 Nun's Priest；第二の尼僧 Second Nun；錬金術師の徒弟 Canon's Yeoman）の述べる話に移る。そのうち2人の話には本論文の焦点であるハーブへの言及が多い。尼僧付き僧侶は修道僧の後に登場して修道僧の話の固苦しさを和らげるため、陽気な話をはじめる。この当時流行していた動物譚の一種で、有名な雄鶏シャンテクレールの物語である。

尼僧付き僧侶の描く雄鶏のシャンテクレールは妻である雌鶏のペルテローテに頭が上がらない。しかし自分の美しい姿と声にかけては自信をもっている。シャンテクレールは狐に褒められて、長く首をのばして声を張り上げたところを捕まえられ、森のはずれまで背負っていかれてしまう。そこで今度は雄鶏のほうで狐を欺いて、追いかけてくる村人たちに向かって大声を張り上げよ、と勧めて、狐が喜んで口を開いた途端に逃げ出す、という筋である。動物譚はイソップ物語の流れを汲むもので、狐と鶏の話もいくつかの系統に分かれるが、チョーサーの版では雌鶏ペルテローテの役割が大きい。

妻ペルテローテの見立てによるとシャンテクレールはcholeric（胆汁質）でhot and dryな性質である。それが夢の中で赤黄色の狐が襲ってきたといって悩んでいた。彼女はそのような怖い夢は夫の消化不良と便秘から来る、と診断し、7種の薬草を食べることを勧める。

- 1 lawriol (lauris nobilis = laurel) 「月桂樹」乾燥させて乾熱の気のある体質のものに飲ませると効く下剤。
- 2 centaure (centuaria) 「沈丁花」湿った、苦みのある薬草で脾臓のさしこみに効く。
- 3 fumetere (fumus terre = fumitory) 「矢車草、センブリ」匂いの強い薬草で、憂鬱症ともなっている場合に効く。
- 4 ellebor (hellebore) 「ヘリボリ、ヘリボク、ウマノアシガタ」強力な薬草で根から殺虫剤をとることがある。
- 5 gaitrys berys (blackhorn berry) 「クロウメモドキ」強力で身体への影響が強い。

6 katapuce (caper-spurge) 「カラクサケマン、セイヨウフウチョウボク」

7 herbe yve (ground ivy) 「カキドオシ」吐き気を催させる。酔い覚ましに効く。

ただし、以上の薬草をシャンテクレールが試してみる前に彼は狐につかまってしまうのである。

「総序歌」でその人物像に触れていない第2の人物は第二の尼僧である。この人の話は黄金伝説 (Legenda Aurea) の中の聖者伝に属するもの、すなわち聖セシリアの話である。セシリアはローマがまだキリスト教徒を迫害していたころ、殉教した処女妻である。彼女は夫ヴァレリアンとその弟ティビュルスを経クリスト教に改宗させたが、その場面でセシリアの守護天使は次のように言う。

The angel seyde, "God liketh thy requeste,  
And bothe with the palm of matirdom  
Ye shullen come unto his blissful feste."  
And with that word Tiburce his brother coom.  
And whan that he the savour undernoom,  
Which that the roses and the lilies caste,  
Withinne his herte he gan to wondre faste,  
And seyde, "I wondre, this tyme of the yeer,  
Whennes that soote savour cometh so  
Of rose and lilies that I smelle heer.  
For though I hadde hem in myne handes two,  
The savour myghte in me no depper go.  
The sweete smel that in myn herte I fynde  
Hath chaunged me all in another kynde." (*Sec. Non Tale* 239～252)

天使は言いました。「神様はお前 (=セシリア) の願いを  
気に入っておられる。お前たち2人とも殉教の棕櫚の葉をとって  
神の聖なる饗宴にあずかるであろう。その言葉と共に  
ヴァレリアンの弟のティビュルスが来ました。彼はばらやゆりの花の  
放つかぐわしい匂いに気がつくとき心のうちでたいそう驚き、  
そして言いました。「一年のこの季節に、わたしがここで嗅いだばらやゆりの  
かぐわしい香は、どこからくるのか不思議です。なぜなら、たとえわたしが  
これらの花を両手に持っていたにしても、その香りはこれ以上深くわたしの  
中に入ってくることはできないからです。わたしの心の中に感じているかぐわし  
匂いが、わたしをすっかり別人に変えました。」

バラや百合は薬草ではないが、ここでは人の心を替えるほどの神秘的な芳香を持つという効能が

あることになっている。セシリアという名前は処女の完全な純潔を表すが、別名「天の百合」ともいわれる。<sup>13)</sup> 百合の花がキリスト教で重んじられるゆえんである。

「総序歌」で述べられている巡礼団にあとから追いついて話をするのは錬金術師の徒弟 (Canon's Yeoman) である。彼は自分が7年間仕えた錬金術師の技がいかにインチキであったか、また逆に自分のほうもいかにして主人をだましたか、を精しく語り、当時流行していた金塊作り、不老不死の薬作りの一端を教えてくれる。彼は多くの卑金属や貴金属の名をあげ、ガラス、陶器、灰、石、油、火などへの言及も多いが、これらを混ぜたり、熱したりする目的は薬剤作りではなく、金や銀を作って金儲けしたいというところにある。

以上CTの中で実用的な効能の期待できそうな草木やハーブについての記述を探してきた。巡礼団のオリジナル・メンバーでない、例えば尼僧院付き僧侶や第2の尼僧の話にその言及が見られたことは興味深い現象である。

野の花や草への礼賛や関心が多くみられるのは *Legend of Good Women* (=LGW) であろう。チョーサーの作品の制作年代順からいえば長編詩 *Troilus and Criseyde* (=TC) がその前にくるが、TCは次の重要なテーマとの関連でのべなければならないので先にLGWにおける草木やハーブをみてみよう。

LGWはチョーサーの初期の物語詩や *The Romaunt of the Rose* (=RR) と同じように長い序詩を持っている。形式はCTと同じようにオムニバス形式で最後の話は未完であるが9つの物語から成り立っている。女主人公達は皆、神話上や歴史上の悲運の女性である。全2700行のうちの5分の1を占める序詩の中でチョーサーは雛菊 (daisy) の冠をかぶった女神を慕い、彼女に愛の神キューピッドへのとりなしをたのんでいる。雛菊は貞節と名誉をあらわす花なので、その後に語られる道徳的9話を導くのに適しているわけである。

Thanne love I most these floures white and rede,  
Swiche as men calle dayesydes in oure toun. (LGW: G 42~43)

Now I have eke this liking, that of all the flowers in the meadow  
I most love those white and red flowers<sup>14)</sup>

This dayesyde, of alle floures flour,  
Fulfyld of vertu and of alle honour,  
And evere ylike fayr and fresh of hewe,  
As wel in wynter as in somer newe,

Fayn wolde I preysen, if I coude aryght;  
But wo is me, it lyth nat in my myght. (LGW: G 55～61)

This daisy, flour of all flowers, filled with  
all excellence and honor, ever and alike  
fair and lusty of hue, fresh in winter as  
well as in summer, fain would  
I praise it if aright I could.  
But woe is me, for it lies not in my power.

詩人は5月の緑の牧場で寝て、その夢の中に緑の園がある。そこで愛の神の妻アルシーテに出会うのである。

And from afer com walkyng in the mede  
The god of Love, and in his hand a quene  
And she was clad in the real habit grene;  
A fret of gold she hadde next her heer  
And upon that a whit corowne she beer  
With flowrouns smale, and I shal nat lye;  
For al the world, ryght as a dayesye  
Ycorouned ys with white leves lyte,  
So were the flowrouns of hire coroune white,  
For of o perle fyn, oriental,  
Hire white coroune was ymaked al;  
For which the white coroune above the grene  
Made hire lyk a daysie for to sene,  
Considered eke hir fret of gold above. (LGW: F 212～225)

Then I looked around the meadow and  
saw him come, leading by the hand a lady  
clothed in a royal habit of green;  
She had a net of gold around her hair, and above that  
as white crown with many flowers;  
for all the world even as the flower of the daisy is crowned  
with little white leaves, such were the flowers of  
her white crown, for it was made of all of

Fine oriental pearl; wherefore the white crown  
above the green with the golden ornament; in her hair,  
made her appear like a daisy.

冠の下地をなす被り物には金のネットがかかり、衣装と一体になると、アルシーテはチョーサーが最もあがめる雛菊の精のようであった。

愛の神キューピッドのほうは、バラと百合で作った冠をつけて、緑の枝の刺繍のしてある絹地の衣をまとっていた。彼らに従ってあらわれた19人の乙女達は雛菊の周りで歌を歌いながら踊るのであった。

That ryght anoon as that they gonne espye  
Thys flour which that I clepe the dayesie,  
Ful sodeynly they stynten al attones  
And kneled down ...  
And songen with o vois (LGWF 292～296)

目がみえないはずの愛の神が、乙女達の歌に耳を傾けていた詩人にむかって、自分はお前を知っている、私の宗教（愛の宗教）と相入れない「薔薇物語」や「トロイルスとクリセイデ」の物語を書いたな、といって怒り出すが、妻アルシーテのとりなしで詩人は許される。詩人はお礼として古今の貞節な女性の物語を語ることになるのである。アルシーテはその会話のなかでギリシャ神話の故事から雛菊の化身ということになっている。

The grete goodnesse of the queene Alceste,  
That turned was into a dayseye; (LGWG 499～500)

(In a book that lies in your chest, have you not the story of)  
the great goodness of Queen Alcestis,  
who was turned into a daisy

愛の神がアルシーテを褒める時はいつでも

Wel hath she quit me myn affeccioun  
That I have to hire flour, the dayesye. (LGWG 511～512)

Well has she requited me for mine affection  
which I bear toward her flower, daisy.



のように雛菊をひきあいに出している。LGWでの植物はチョーサーのお気に入りの花ということになる。

TCはトロイ戦争の故事の中で表題の2人の悲恋を扱った物語詩（8234行）である。トロイとギリシャの戦いについての先行する伝説や民話の翻案の集大成という中世の方法の通り、チョーサーは直接的にはこの物語の筋をボッカチオの*Il Filostrato*（「恋のとりこ」）からとったのであるが、後者はそれを12世紀末のフランスのブノワ・ド・サンモール（Benoit de Sainte-Maure）の「トロイ物語」（*Le Roman de Troie*）の恋愛物語から着想を得て書いている。「トロイ物語」は言うまでもなくトロイ戦争の話が中心であるから、ギリシャ人Homerの*Illiad*、Virgilの*Aeneid*、シシリー島出身のGuido de la Colonneの「トロイ物語」（*Historia Troiana*）、その翻案の「トロイ滅亡史物語」（*The “Geste Hystoriale” of the Destruction of Troy*）を下敷きにしている。更にはクレタ島のDictysの「トロイ戦争」（*Ephemeris Belli Troiani*）、フリギア人のDaresの「トロイ滅亡史」（*De Excido Troijae Historia*）などの戦争資料や挿話を参考にしている。トロイのプリアモス王の息子のトロイルスの存在はそれらの物語の中で認められるにしても女主人公のクリセイデはBriseisまたはChrysesという名前はあるものの重要な役割をしていない。チョーサーのこの物語の梗概は以下のようなものである。

10年来ギリシャ軍に包囲されていたトロイの滅亡を予言したカルカスの娘クリセイデ（未亡人）は王子トロイルスに見初められ、叔父パンドルスの手引きで彼と結ばれる。しかしギリシャ軍との交渉でトロイ側で捕虜となっていたギリシャ人アンテノールと引き換えに、クリセイデは父のいるギリシャ方に引き渡されることになり、泣く泣く城外のキャンプに赴く。その時先導したギリシャ兵士デイオメデスはクリセイデに言い寄り、心細さからついになびいた彼女の裏切りはトロイルスの知るところとなる。彼は絶望のあまり自暴自棄になり、ギリシャ軍と戦って死ぬが、その魂は第七天に上り、トロイを見下ろして笑った。

この主筋は、ボッカチオの*Il Filostrato*と大体同じであるが、後者が5700行余であるのに対し、チョーサーは8239行と大幅にこれを拡充している。圧縮、改変部分はもちろんあるが、拡張部分にはチョーサーが後の資料からとったもの、例えば、ペトラルカのソネット、ヴァーギルの作品の中のイーニ阿斯についての記述、ギヨーム・ド・モリスの「薔薇物語」の断片などがある。その中で一番特徴的なものはTCの各巻頭部分にみられる神々への献辞（Invocation）であろう。<sup>15)</sup> 献辞の中で作者はかなり哲学的なことを述べる。又、トロイルスが恋というものを軽蔑していたのに恋の神キューピッドの矢に射すくめられて不可避免的にクリセイデを恋してしまった、その自分の感情の落差を歎くところ（ff.I-200, 300）、パンドルスに打ち明けるまでの苦悩（I-400～878）、その前後の宮廷愛の形式にのっとった煩悶の仕方、クリセイデの恋愛に対するためらいや損得勘定（II-771～810；915～930）などはかなり理窟っぽく頭腦的な構築物である。

トロイルスがパンドルスに自分の恋を打ち明け、助力を乞う場面の対話の中にハーブへの言及があるが、これもかなり観念的な取扱いを受けている。後者が前者にそれまでの恋愛否定の毒舌を改めさせようと For thilke grownd that bereth the wedes wikke / Bereth ek thise holsom herbes

「毒草の育った土地には薬草も育つ」(I-946～947) トロイルスの悩みの源も慰めの源と変わりうる、と説教するからである。ここでは更に雑草や花への言及も見られる。

... as ful ofte

Next the foule netle, rough and thikke,

The rose waxeth swoote and smothe and softe;

And next the valeye is the hil o-lofte;

And next the derke nyght the glade morwe;

And also joie is next the fyn of sorwe. (TC I 947～952)

丁度、いやな刺草（イラクサ）がぼうぼうと生い茂るすぐ側に、

しばしば薔薇の花が美しく気持ちよく優しく咲き出すっていうようにね。

谷間のすぐ側には丘が高くそびえたってるんだし、

暗い夜のすぐ後には楽しい朝がつづくんだし、

また悲しみが果てればすぐ後ろに喜びが待ってるものですよ。

又、諺や格言が多いこともこの物語の特徴であるが、パンダルスは *plaunte a tree or herbe ... / And on the morwe pulle it up as blyve*; 「色々工夫して草木を植えておきながら、あくる朝には忽ち引っこ抜いてしまう」(I-965) という忠告もしている。

パンダルスはトロイルスの恋を成就させるべく舞台を整える。トロイルスの兄デイファバスにクリセイデがポリフェテスというトロイ人に財産を狙われているから助けてあげてほしいという作り話(I-1408～1459)をして、デイファバス邸に招いてもらい、クリセイデをトロイルス兄弟姉妹に近づける。そして、ある大雨の予兆のある夜にパンダルスは自宅にトロイルスを待たせておいて、そこへクリセイデを呼び寄せる。今度はホラステという男がクリセイデに横恋慕しているので、トロイルスが苦しんでいる、といってクリセイデの同情心をかうのである。(III-50～850) パンダルスの計略はみごとにあたって、クリセイデは素直に驚き、トロイルスの所へ行って話をし、2人はついに結ばれる。その時クリセイデが (*Criseyde*) ... / *Right as an aspes leef she gan to quake* 「白楊（ハコヤナギ）のように身を震わせた」(III-1200), そして *And as aboute a tree, with many a twiste / Bytrent and writh the swote wodebynde, / Gan ech of hem in armes other wynde* 「美しい忍冬（スイカヅラ）が無数の蔦で木の周りにぐるぐる巻きつくように、2人は互いに両腕で、相手のからだをからめあいました」(II-1230～1232) という」有名なくだりがある。恋人のふるえを白楊のそよぐさまにたとえ、また、忍冬のようにからみつく、という表現は作者の独創ではないかもしれないが、天然の草木を場面に応じて効果的に使っている例といえるであろう。

2人はしばらく至福の逢瀬を重ねるが、やがて前述のようにトロイの勇士アンテノールをトロイに戻す交換条件としてクリセイデがギリシャの陣地へ引き渡されることになる。これはトロイを裏

切ったカルカスが強く望んだためであったが、クリセイデはトロイルスと別れ難く、What is Criseyde worth, from Troilus? / How sholde a plaunte or lyves creature / Lyve withouten his kinde noriture? 「トロイルス様を離れて、クリセイデにどんな価値があるのかしら? 植物も動物も自然の食糧がなければ、どうして生きていけるだろう? だって、緑の草木も根を失えば速やかに枯れ死するものなり、そういう言葉を何度も聞いたことがあるんだもの」(IV-766~768)と歎くが致し方なく、ギリシャ軍のテントに連れ去られる。彼らの別れの悲しみはas is ligne aloes or galle「二人の流す悲しみの涙は普通の涙とちがって苦悩のあまりか胆汁のようににがいものでした」となっている。その後の展開は梗概で示したとおりであるが、この物語の後半には理窟こそあれ、前述した哲学的思索もなく、自然描写もない。

最後に、中世詩人の多くがのべている「五月の美しさ」については、この物語にも2箇所言及されていることをつけ加えたい。

In May, that moder is of monthes glade, / That fresshe floures, blew and white and rede, / Ben quike again, 「楽しい月々の母である五月、冬の間には枯れ凋んでいた藍、白、紅のさわやかな花が蘇り、牧場という牧場には馥郁たる香りが一杯に漂い、(II-50~52)」とか This Diomed, as fresh as branche in May 「五月の木の枝のように澁刺としたダイオミーデース・・・(IV 844)」である。

全体としては「トロイルスとクリセイデ」は戦争を題材にとった2人の若人の恋愛物語で、筋の展開以外は登場人物の心の内側を感情的というより観念的に描写しているので、自然環境の入る余地は少なかったといえる。

以上チョーサーの作品における自然・草木・ハーブについての描写をみてきた。そこではペルテローテの下剤としての草やアルシーテの遺体を焼く香木など薬用として草花がとりあげられていたし、それ以上に物語の背景としての自然、道行にみられる草木の叙述が多かった。草木や自然は物語の舞台装置のひとつであったといえよう。時代が下がるともっと個々の草花や薬草についての記述が多くなってくる。シェイクスピアやロマン派の作家、詩人たちはもっとたくさん意識的に花について語っているし、近代でも例えば Frances E. Burnett の *Secret Garden* (1911) などでは花や木や草、薬草、その他の自然環境への愛と賛美がつまっている。今私たちは人工的あるいは無機質な舞台装置の中で暮らしていると感じることがあるし、そこでは身体の調子の悪い時は科学技術の粋である薬剤の恩恵を受けている。しかし、イギリスの中世の物語の中に自然を探ることによって再び自然の持つ視覚的、嗅覚的、医学的癒しに気づくことができたのではないだろうか。長く深い英国の文学の伝統のある面をより良く、積極的に私たちの身体に取り込めたような気がする。チョーサーの作品は決して声高にではないが、静かに、しかし力強くその例を提示してくれているのではないか、と思われる。

## 註

- 1) Murray, A.H., et. al *The Oxford English Dictionary*, Clarendon, Oxford, 1888~1933, s.v. plant.

- 2) Milward, Peter. 『英文学のための動植物事典』. 大修館1990, pp. 428～430.
- 3) Murray. 『前掲書』 s.v. grass 1-a.
- 4) 『前掲書』 s.v. herb.
- 5) 作品の年代は寺澤芳雄他編. 『英語史総合年表』. 研究社. 1993, pp. 81～83.
- 6) Benson, Larry D., ed. *The Riverside Chaucer*,. Oxford University Press, 2008, p. xii.
- 7) 『前掲書』 p. xi.
- 8) 『前掲書』 p. xv. 以下チヨースーの生涯はBenson編中のMartin M. CrowおよびV.E. Lelandによる。又、原文の引用も *The Canterbury Tales* の「総序歌」以外はBenson編（註6）による。
- 9) *The Book of the Duchess, The House of Fame, The Parliament of Fowls* の和訳は塩見知之訳の『チヨースーの夢物語詩』（高文堂 1981）によるが、笹本長敬訳の『チヨースー初期夢物語詩と教訓詩』（大阪教育図書 1998）も参照した。
- 10) *The Canterbury Tales* の「総序歌」の原文は大山俊一註の『カンタベリー物語：プロローグ』（篠崎書林 1997 年）による。
- 11) *The Canterbury Tales* の和訳は主として梶井迪夫訳『カンタベリー物語』（上・中・下）（岩波書店 2008）によるが、笹本長敬訳『カンタベリー物語』（全訳）（英宝社 2002）も参照した。
- 12) Murray, s.v. virtue 1-a: The power or operative influence inherent in a supernatural or divine being. 1-b: An embodiment of such power.
- 13) 梶井訳（註11）下巻 p. 78.
- 14) John S.P. Tatlock と Percy MacKaye 共訳（現代英語版）*The Modern Reader's Chaucer*, (Free Press, 1966, New York) による。
- 15) 宮田武志訳. 『トロイラスとクリセイデ』. 大手前女子学園. アングロノルマン研究所発行 1979.

#### 引用文献

- 1) Benson, Larry D. *The Riverside Chaucer*. 3<sup>rd</sup> ed., Oxford University Press, 2008.
- 2) Tatlock John S.P., MacKaye, Percy. *The Modern Reader's Chaucer*, Free Press, 1966.
- 3) 大山俊一註釈. 『カンタベリー物語：プロローグ』. 篠崎書林. 1997.
- 4) 笹本長敬訳. 『チヨースー初期夢物語詩と教訓詩』. 大阪教育図書, 1998.
- 5) 塩見知之訳. 『チヨースーの夢物語詩』. 高文堂. 1981.
- 6) 梶井迪夫訳. 『カンタベリー物語』. (上・中・下) 岩波書店. 2008.
- 7) 宮田武志訳. 『トロイラスとクリセイデ』. 大手前女子学園アングロ・ノルマン研究所. 1979.